

機関番号：32808

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20530754

研究課題名（和文）乳児保育室の環境構成に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Research of designing environment of nursery room

研究代表者

汐見 稔幸（SHIOMI TOSHIYUKI）

白梅学園大学・子ども学部・教授

研究者番号：70146752

研究成果の概要（和文）：

本研究は、乳児保育室の環境構成が子どもの行動に与える影響について、環境条件として空間構成と音に注目し、アクションリサーチ的手法を取り入れて調査した。その結果、部屋を単一空間から仕切られたより小さな空間にしたり、部屋から 80dB を超える音を減らしたりすることによって、子どもが落ち着き、集中し、じっくり遊ぶようになることがわかった。

研究成果の概要（英文）：

This study examines to the influence to young infant's behavior of environment (space, noise) of nursery room with action research theory. By modifying environment of nursery room, we found that children became to play more steady, concentrated, continued than before..

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：幼児教育・保育、乳児保育、赤ちゃん学

1. 研究開始当初の背景

子どもの発達については、近年、その過程における環境要因の影響が大きいことが明らかになってきている。国も、そうした動向を受けて、「環境による保育」を提唱しているが、保育における環境構成の基準はまだまったく明らかにされていない。他方で、保育の現場では、特に乳児の保育への需要が大きく、多数の乳児を大きな部屋に詰め込んだ保育が疑問なく展開されているという事実が

ある。

保育の環境構成の基準を明らかにするための研究は、これまでのところ、国内外において確認されていない。とりわけ乳児保育室の環境構成が子どもの生活や育ちにあたる影響を判断できるような基礎的データはきわめて少ない。

2. 研究の目的

そこで本研究は、乳児保育室の環境構成が、子どもの行動の発達にどのような影響が生

じるのかについて、空間と音響に注目して明らかにすることを課題にした。それと同時に、聞き取り調査等によって保育士の環境構成に関する意識がいかに変化していくのかもまた本研究では調べた。以上の作業を通じて、乳児保育室の環境構成に関する原理を導き出すことを、最終的な目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、保育の実際を調査するために実験的な手法は使えない。そこで保育所の中でわれわれの関心に沿った研究・改善という問題意識を有しているところを選定し、同時に日常保育の改善を進めるための所内研修のあり方を探ることを課題意識としてもつところに共同研究を依頼してきた。本研究の舞台となった神奈川県内にあるK保育所もそうした視点で選ばれている。保育所メンバーの研究的、実践的な姿勢を尊重しつつ調査は進められ、それをここでは「アクションリサーチ的研究」と総称している。

実際に保育室の環境条件として注目したのは、自由遊び時間における空間と音響である。2007年から0歳児室の空間構成について、また2009年から1歳児室の音響環境に焦点をあてて調査を行ってきた。調査は、全体として3つの段階（変更前9月前後、変更後の第1ステージ11月前後、第2ステージ1月～2月）に分けられる。変更前とは、保育者が現時点における保育室の環境構成を振り返る段階である。そのために自由遊びの時間をビデオカメラで撮影し、それをみなで視聴して保育室の環境について議論した。その結果をふまえて、保育者によって部屋の環境が変容されたのが第1ステージである。変更前と同様に、環境を変えた後の保育室の様子をビデオカメラで撮影し、保育者はその映像をもとに環境の変化が子どもにあたえる影響について話し合った。それをもとに再度保育室の環境を変容させたのが第2ステージである。その様子を、これまでの同様にビデオカメラで撮影した。また各段階では、ビデオ撮影だけでなく、騒音計とデジタルレコーダーを設置して部屋の騒音レベル（dB）や音源を測定した。

変更前、第1ステージ、第2ステージで撮影した保育室のビデオ映像から、子ども3名の動線と行動を「空間、行為、視線、かかわり」というカテゴリーごとに5秒単位で記録し、それを分析した。

4. 研究成果

(1) 0歳児室における空間構成の変容と子

どもの行動変化

0歳児室の空間構成は、変更前は仕切りのない単一空間であったが、第1ステージにはままごとコーナーとその他からなる部屋になった。さらに第2ステージには、ままごとコーナーに加え、太鼓橋を置いた動的遊びコーナーや積み木等で遊ぶ静的コーナーに仕切られ、大きく3つのコーナーからなる部屋になった。

それにもなつて、子どもたちの遊びの質もまた変わっていった。はじめに何も置いていない単一の空間で一定の広さがある場合、乳児はその空間を円形に移動する傾向があることが分かった。これを「回遊」と表現すると、何も無い空間では子どもたちは回遊することでも自らの遊びのエネルギーを発揮しようとする傾向があるということが仮説的に導かれたといえる。そして、その回遊の経路の途中に、まず静的な遊びが集中してできる空間を配置し、次に経路の別の場所動的遊びが可能ツールを配置するという環境構成の変容を試みた。その結果、子どもたちは回遊だけのときよりも、特定されたいわば色つきの空間とその周辺で、より長い時間、ひとつの場所にとどまって、ひとつの遊びに集中する傾向が増すことが判明した。特定の遊び、活動への集中度あるいは熱中度の高さが望ましい発達の条件であるとする、こうした変容後の乳児の行動の方が望ましいということになり、それを可能にする環境構成の方が望ましいということになる。本研究はその評価までを射程に入れていないが、回遊できる空間の経路上に、動的そして静的な、より規模の小さい空間を配置すると、子どもの行動はより落ちついた、集中度の高いものになる傾向があること、これは本研究が導いたひとつの仮説であると主張できよう。

何も変化もない単一空間よりも、いくつか異なったアフォーダンス空間が混じった空間、そしてそこに子どもたち自身の興味・関心のある遊具、教具のある空間がある方が、子どもたちの集中心を導き出しやすいこと、このことをすでに発見している保育所は多くあると思われる。しかし、そのことを一定の視点でデータ化して示したのは本研究がはじめてではないかと思われる。

(2) 1歳児室における音響環境の変容と子どもの行動変化

また環境構成の変容が子どもの遊びの質に影響をあたえることは、音響環境についても同様であった。変更前の1歳児室は、床はフローリング、廊下や隣の教室とは90cm

の棚で仕切られておりオープンの状態であった。そのために、フローリングによる音の反響に加え、保育室の外から音漏れしている状態であった。しかもそれが 80dB という街の雑踏と同じレベルを超えることも少なくなかった。そこで第1ステージでは、保育者自らが子どもへの声かけなどのときにむやみに大きな声を出さないように注意することになった。また一部のコーナーにカーペットを敷くようにした。それによって 80dB を超える保育者の声やフローリングにプラスチック製のおもちゃが落ちる音が減少した。さらに第2ステージでは、隣の部屋から音漏れを防ぐためにカーテンを設置し、一部を除いてすべてのコーナーにカーペットを敷いた。

1歳児室の音響環境と子どもの行動をビデオ分析した結果、音響環境の変容により子どもは落ち着き、集中し、そしてじっくり遊ぶようになっていった。またオープンな部屋による外からの音漏れやフローリングによる音の反響など、音響環境を改善するうえでハード面における問題も大きいこともわかった。保育室の音響環境が子どもの遊びに与える影響についてはほとんどデータがない状況であることから、今後も引き続き調査を続けていく必要があると考えている。

(3) 保育者の意識変化

子どもの行動に加えて、本研究では保育室の環境構成を変化させていく保育者の意識にも注目した。担任保育士による振り返りの記録を分析した結果、主に三点が明らかになった。

幼稚園、保育所は人事交流が相対的に少なく、また他の職種との交流もないため、一度ある園に勤めそこの保育になじむと、その見直しが行われにくい。しかもビデオ映像で自分たちの保育の様子を見ること自体、保育者にとってはじめての経験で、みな口を揃えて「恥ずかしい」と語っていた。ありのままの保育を直視することは、保育者にとってとても勇気のいることであった。

その点で、園長をはじめとする管理者の姿勢が大事であることは重要な教訓として記憶されねばならない。当初、保育者たちは本調査に対して園長に自分たちの不安を訴えるかのように質問していた。「忙しいのはわかる。わかるけれども忙しいからって、保育の手抜きは子どもに通用しません。子どもにはこの時間も大事です」と真摯に答えていた。園長のこうした姿勢が、保育者たちを励まし、前向きに見直していこうとなった原因にな

り、大切な成果を導く要因にもなっていたと思われる。

保育者の意識変容にとって大事なことのもうひとつは、取り組んでいる過程で取り組みによる成果を確認する作業が絶対的に必要だということであった

三つめに大事であったと思うのは、保育者間で話し合いを重ねるなかで保育者が悩みを共有するようになり、保育者集団としての絆を強めることができたことであった。

以上から、研究者のカウンターパートが個人の実践者ではなく保育者の集団である本ケースのような例では、よい研究的関係を築くまでには時間と努力が必要であった。おそらく一般の保育所はこうした研究者との協同による保育の見直しの経験がないと思われるので、本ケースは保育所における職場内研修の新たな可能性のモデルを創出する意味があった。

(4) 今後の課題

今後は、保育室の環境構成が子どもの行動の発達に与える影響をより実証的に明らかにするために、今回導いた仮説的モデルをもとに、今後保育現場と協同してさらにデータを収集したいと思っている。

それによって、乳児保育室の最低基準をもう少し立体的に示せるようになると考えている。また乳児保育の質について、「乳児保育環境アセスメント」研究の端緒を切り開く同時に、今後の保育及び子育て事業の質的評価の基準作りの手がかりとなるであろう。さらに本研究の成果をふまえて、保育環境改善に向けて政策的提言への方向性も検討している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4件)

- (1) 村上博文、汐見稔幸、志村洋子、松永静子、保坂佳一、富山大学乳児保育室の空間構成と子どもの遊びにおける変化—ブースの設置による活動空間の変化—、こども環境学研究、Vol. 6、No. 1、pp. 56-62、2010
- (2) 村上博文、乳児保育室の空間変成が子どもや保育士に与える影響—自由遊びの時間におけるアクションリサーチ—、東京大学大学院教育学研究科紀要、Vol. 49、pp. 21-32、2010
- (3) 村上博文、乳児保育の環境条件と子ども

の変化－保育室の空間構成に関するアクションリサーチ(自由遊びの時間)－、ベビー・サイエンス Vol. 9、pp. 46-63、2009

- (4) 村上博文、汐見稔幸、志村洋子、松永静子、保坂佳一、富山大士乳児保育室の空間構成と保育及び子どもの行動の変化－「活動空間」に注目して－、こども環境学研究、Vol. 3、No. 3、pp. 28-33、2008

[学会発表] (計 8 件)

- (1) MATSUANGA SHIZUKO, SHIOMI TOSHIYUKI, MURAKAMI HIROFUMI, Group Care of 0-Year-Old Children in Japan (1), OMEP26th World Congress, GÖTEBORG, SWEDEN、2010年8月
- (2) MURAKAMI HIROFUMI, MATSUANGA SHIZUKO, SHIOMI TOSHIYUKI, Group Care of 0-Year-Old Children in Japan (2) -Space Design of Nursery Room through Action Research, OMEP26th World Congress, GÖTEBORG, SWEDEN, 2010年8月
- (3) 村上博文、松永静子、保坂佳一、富山大士、汐見稔幸、志村洋子、乳児保育室の空間構成と子どもの行為－自由遊びに注目して－、日本保育学会第63回大会、松山東雲女子大学、2010年5月
- (4) 松永静子、村上博文、保坂佳一、汐見稔幸、志村洋子、保育者の環境への意識変容に関する－考察－乳児保育における環境構成の原理の構築に向けて(2)－、日本保育学会第61回大会、名古屋市立大学、2009年5月
- (5) 村上博文、松永静子、保坂佳一、富山大士、汐見稔幸、志村洋子、乳児保育室における環境変成の試み－乳児保育における環境構成の原理の構築に向けて(1)－、日本保育学会第61回大会、名古屋市立大学、2008年5月
- (6) 村上博文、汐見稔幸、志村洋子、松永静子、保坂佳一、富山大士、乳児保育室の環境変成と保育及び子どもの行動の変化－子どもと保育士の動線に注目して－、日本赤ちゃん学会、第8回学術集会、千里ライフサイエンスセンター、2008年4月
- (7) 村上博文、汐見稔幸、志村洋子、松永静子、保坂佳一、富山大士、乳児保育室の環境変成と保育及び子どもの行動の変化－対象児における遊びの質的变化に注目して－、こども環境学、名古屋工業大学、2008年4月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

汐見 稔幸 (SHIOMI TOSHIYUKI)
白梅学園大学・子ども学部・教授
研究者番号：70146752

(2) 研究分担者

志村 洋子 (SHIMURA YOKO)
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：60134326

(3) 研究協力者

村上 博文 (MURAKAMI HIROFUMI)
富士常葉大学・保育学部・講師
研究者番号：30612139

松永 静子 (MATSUNAGA SHIZUKO)
白梅学園大学・子ども学部・准教授
研究者番号：70551563

保坂佳一 (HOSAKA YOSHIKAZU)
CHS 子育て文化研究所

富山大士 (TOMIYAMA FUTOSHI)
バオバブ保育園